

○輔師 守(北見工業大学 地域共同研究センター)

内島典子(北見工業大学 地域共同研究センター)

## 1. はじめに

地方に位置する大学が地域社会に根ざしてその存在価値を十分に発揮するためには、大学の活動に地域の環境を色濃く反映させる必要がある。これまでに筆者らは、地域と大学との間により良い関係を築くための考察の視点として、大学の研究環境<sup>1)</sup>、地域の産業構造<sup>2)</sup>、更には自治体との関係<sup>3)</sup>、を取り上げ解析してきた。本報では北見工業大学を題材とし、より広く地域の地理・自然・歴史の視点から地域と大学との関係について解析する。

## 2. 北見地域の地理・自然・歴史と北見工業大学との関係

### 地理的な環境:

北見地域は北海道の中でも特に冷涼である(図1)。この地理的環境を反映し、北見工業大学では寒冷地防災に関する研究や地域自治体との連携をはじめ、寒冷地域に固有の地域/大学間の関係を構築している。

広大なオホーツク地域は四方を山と海に囲まれている(図2)。北見工業大学は、道東の日常的な生活圏・産業圏における唯一の工学系大学・希少な大学として、北見市を中心とする地域と緊密な関係を築き上げている。この関係は、共同研究の実態や地方自治体との連携体制などに如実に現れている。

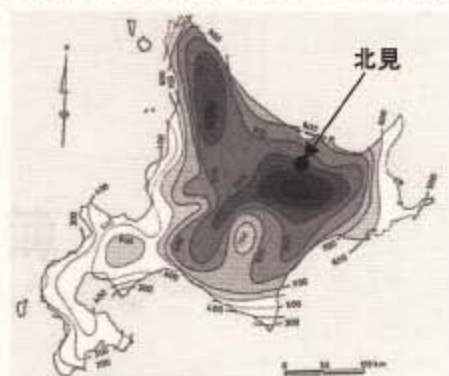


図1. 北海道における積算寒度分布<sup>4)</sup>

### 自然環境:

北見地域は半径100kmの範囲に知床・阿寒・大雪の3国立公園と網走国定公園を擁し、国内有数の自然環境に恵まれた地域でもある(図2)。これを反映し、北見工業大学は環境モニタや一次産業の環境側面に関する研究など、環境関連の研究・地域連携に精力的かつ継続的に取り組んできている。



図2. オホーツク地域の地理・自然<sup>5)</sup>

### 歴史:

道東の中核都市に発展した北見の今は、薄荷を生産した過去無くしては存在しない(表)。現在では地域での薄荷生産は皆無に等しいが、近年、改めて薄荷をはじめとするハーブに着目した産業振興への挑戦が活発化しており、北見工業大学の研究・地域貢献活動もその一翼を担っている。

地域の政治・経済・生活などあらゆる側面に強い影響を持つ地域の地理・自然はもちろんのこと、地域の現在だけではなく過去をも視野に入れた大学と地域との関係を築くことにより、地域に無くてはならない大学として、他の大学ではなし得ない価値を創造することが可能となる。本報では北見工業大学を題材とし、それら地域の地理・自然・歴史の視点から地域/大学間の関係を解析した結果について報告する。

表 北見市の歴史(薄荷生産、道路・鉄道整備に注目して)<sup>6)~8)</sup>

西暦年	できごと・特記事項	人口
1869年	蝦夷地に開拓使設置	
1891年	国鉄を便役して網走～上川間「北見道路」完成	
1898年	野村牛村に高知県の移民団、北光社入地	約 2千人
1902年	薄荷栽培開始	約 5千人
1911年	池田～野村牛間に鉄道開通	約 6千人
1915年	薄荷景気により経済的に発展、一級町村制野村牛町	約 1万6千人
1932年	石北線全通	約 3万5千人
1940年	薄荷生産量急増、作付2万t、世界シェア70%	約 3万8千人
1942年	市制施行、野村牛町を北見市と改称	約 4万人
1979年	人口10万人を突破	約 10万人
1983年	薄荷生産終結	約 10万5千人
2006年	新「北見市」、石北線からオホーツク海まで110km	約 13万人

1) 第6回産学連携学会(大分大会)2008、0627A0900-1 地域振興に貢献する地域と大学との関係(第1報)

2) 第6回産学連携学会(大分大会)2008、0627A0900-2 地域振興に貢献する地域と大学との関係(第2報)

3) 第7回産学連携学会(福井大会)2009、地域振興に貢献する地域と大学との関係(第3報)

4) S. Kinoshita, et.al., Natural Science, Vol.1, No.2, pp. 1979.

5) 北見工業大学2007年度大学案内、p53

6) 平成19年度北見市統計書

7) 北見市HP>歴史・風土>北見市の生い立ち、2009

8) 北見市HP>ハッカとハーブ>北見のハッカの歴史、2009